

ジュリアン・グラック『ひとつの町のかたち』 における都市の詩学

相互テキスト性と実存的空間

新莊 直大

序論

「ひとつの町のかたちのすみやかに変わることは、
ああ！ 人の心も及ばぬほど¹！」

ジュリアン・グラック (1910-2007) の『ひとつの町のかたち』*La Forme d'une ville* (1985) は、作家が 1921 年から 1928 年まで 10 代の多感な時期を過ごしたナントをめぐるエッセイである。都市論と自伝のまざりあう特異な様式を備えた本書を、グラックは上に掲げたボードレールの「白鳥」*Le Cygne* の引用から始める。しかし、グラックは、ボードレールが示した住みなれた都市が変化することへの哀惜をくりかえすことはない。逆にグラックは、彼にとっての揺籃の都市ナントの変化を自身の成長とも重ね合わせながら、都市の変化を肯定的に捉え直そうとしている。この考えは、全体が 10 のまとまりから構成される本書²において、全体を予告する序文の役割をなす初めの部分と、それと呼応する末尾でくりかえし示される。ボードレールをはじめ、近代以降、都市の急速な変化への哀惜を語ってきた多くのエクリチュールに反して、『ひとつの町のかたち』は、この変化の肯定によって、失われた過去の都市空間への憂いにみちた哀惜から解き放たれ、すがすがしく未来に開かれたテキストになっている。この変化の肯定は、先行研究でもつとに言及されてきた³が、本稿では、それらの先行研究を受け継ぎつつ、変化の肯定そのものよ

¹ Charles Baudelaire, « Le Cygne », *Les Fleurs du Mal* ; *Œuvres Complètes*, t. I, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1975, p. 85.

² 『町』は全体が 10 個のまとまりに分かれているが、番号がふられているわけではなく、明確な章立てとしては分けられていない。José Corti の単行本では、空白があり、ページが改められている。以降、このようにページが改まっている部分をまとまりとして考え、便宜的に「章」と呼ぶ。

³ 『ひとつの町のかたち』の変化の肯定に関して、1 章と末尾グラックが語る都市の変化の肯定については、永井敦子「訳者解説」（『ひとつの町のかたち』、書肆心水、

りも、その背景にあるグラックの都市の捉え方に着目し、相互テクスト的に織りあげられた実存的空間として都市を書くグラックの詩学に注目する。

さらに、『ひとつの町のかたち』を独特な書物にしているのは、ナントのあらゆる場所と結びつけられる数々のテキストである。すでに見たボードレーの引用を含め、本書のなかでは、多くのテキストがナントの風景や建物と結びつけられながら引用される。グラックは『偏愛の文学』*Préférences* (1961) や、『読みながら書きながら』*En lisant en écrivant* (1980) など、本書の執筆以前にも、多くの場で偏愛するテキストについて語ってきた。『ひとつの町のかたち』では、それらのテキストが揺籃の都市ナントに位置づけられることで、偏愛の奥底にある作家グラックの形成とのかかわりが明かされる。同時に、『シルトの岸辺』*Le Rivage des Syrtes* (1951) や「コフェチア王」*Le Roi Cophetua* (1970) など作品名が明示されるものから、されないものまで、グラック自身のテキストの源泉をナントのなかに見出すことができる。グラックは本書のなかで、こまごました個人史を開陳することには非常に抑制的であるが、一方で、ナントについて書きながら創作の原風景を読者に垣間見せてくれる。

都市論と自伝の溶けあうエクリチュールとしての『ひとつの町のかたち』をかたちづくるこれら二つの特徴、すなわち、都市の変化の肯定と作家グラックの形成の秘密を共有するような書き方には、都市に対するグラックの独特な捉え方がかかっている。『ひとつの町のかたち』において、都市は単に外的に画定された環境として認識されているのではない。グラックは本書のなかで、都市をテキストや身体に重ね合わせながら、自らの実存とかかわる空間として書こうとしている。このようなグラックの都市の捉え方は、本書のなかで一貫した詩学といえるものである。そこで、本論では、『ひとつの町のかたち』の根底にあるグラックの都市の詩学について明らかにする。まず、都市とテキストの同一化を起点に、本書において都市が相互テクスト性 *intertextualité* のなかで織物として捉えられていることを指摘する。そのうえで、都市の身体化に注目しつつ、想像力や多層的な引用を含みながら作家の生にかかわる実存的な空間として都市を捉えるグラックの詩学をみていく。

2004年) および、三ツ堀広一郎「都市と自伝 —— グラック『ひとつの町のかたち』とベンヤミン『ベルリンの幼年時代』の対比から」、『比較文学年誌』第43号、理想社、2007年を参照されたい。また、モニュメントの否定と空き地の称揚を「生命体」としての都市と結びつけ、グラックの変化の肯定をみちびく塩塚の論もある(塩塚秀一郎「ジュリアン・グラック『ひとつの町のかたち』における変化の肯定 —— モニュメントと空き地をめぐる」、『文学と環境24』、2021年)。

相互〈テキスト＝都市〉性の詩学

都市のテキスト性

『ひとつの町のかたち』（以下、『町』とする。）における都市の詩学について詳細な検討に入るまえに、前提として、『町』において語られる都市それ自体がテキストと結びつけられていくことを確認しよう。

『町』では、都市を織物のイメージで表現する箇所がいくつか現れる。グラックは、『町』のなかで繰り返し、都市を「編み物」のアナロジーで表現している。

たとえば、グラックは『町』全体の流れを予告する初めの章において、町に住むことを「編み目を織りなすこと」と表現する。

ひとつの町に住む、それは日々の往来によって道程の編み目を織りなすことだが、その編み目はごく一般的には、何本かの主軸のまわりにまとまる。労働のリズムに結びつけられた移動を、郊外から中心へ、中心から郊外へ運ぶ行き帰りの運動を傍に置かなら、アリアドネの糸は、真の都市生活者によって観念的に都市の向こうに展開され、その渦のなかで不規則な毛玉の特徴をもつ。道と広場の入り組んだ中心のすべては、目の詰まった縫い目の往復の網のなかに包み込まれる⁴。（下線引用者）

ここで、町に住むことは、「真の都市生活者」の日々の習慣的な往来によって、「主軸」のまわりに緊密な「縫い目」を形成することとして表現される。つまり、習慣的な移動が都市を織りなすが、通い慣れた限定された区画だけが「目の詰まった縫い目の往復の網」になるという。実際、グラックは、ナントを離れたのちに住んだパリが、モンパルナス通り周辺の「四辺形」に町が収まってしまふ、と述べる。

それに対し、上の引用の直後に「ナントではそのような住み方はしなかった」と書いているように、「真の都市生活者」が形づくる目の詰まった網のイメージは、ナントには当てはまらない。以下の引用では、そのような緊密な編み目のイメージと対比的なナントのイメージが語られる。

私の心に自然に立ち上がるナントのイメージは、このような理由で〔訳注：寄

⁴ Julien Gracq, *La Forme d'une ville* [1985]; *Œuvres complètes*, t. II, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1995, p. 771-772. 以下、『ひとつの町のかたち』のテキストは上掲のプレイヤード版『全集』第2巻を参照し、*FV*と略記する。日本語訳は拙訳を掲げるが、永井敦子訳『ひとつの町のかたち』書肆心水、2004の既訳を参照した。

宿舎に許可された隔週の散歩の行先が町はずれの緑地帯だったという理由で」、人口の多い中心部の街路という迷路というより、むしろ放射状に分岐したゆるい結び目のイメージであり続けた。その道路に沿って、電気が編み目を通して逃げるように、都市の流体は田舎のなかに逃げ出し、溶けていく。私は、そのようにして、都市の織物がほつれ、ちりちりになるが、完全に都市を捨てて田舎に向かっているのではない境界に対して、おそらく他のものよりも敏感になったのだ⁵。（下線引用者）

注目すべきは、パリと対比的に語りながらも、やはり都市が織物のイメージによって捉えられている点である。上の引用においても、「結び目 *un nœud*」や「織物 *le tissu*」、「ほつれる *se démailler*」、「ほつれてちりちりになる *s'effiloche*」、「布のへり *les lisières*」といった単語が連続して現れており、都市が織物のイメージと重ねられていることがわかる。ナントのイメージは、初めの章の引用で言われた「目の詰まった縫い目の網」に対応する「迷路」よりも、「ゆるい結び目」のイメージであると言われる。つまり、厳格な寄宿舎の制限のもとで町の周縁部に限定された外出によって、グラックの内部のナントは、中心部の街路が緊密に入り組んだ網の目のイメージではなく、都市という織物が田舎に向かって「溶けていく」ような放射状に広がる結び目のイメージになったというのである。だが、対比的に表現されながらも、どちらも一貫して都市は織物のイメージと重ね合わされている。

このような都市と織物のイメージの重ね合わせは、必然的に都市とテキストの重なりを喚起する。テキスト (*texte*) は、「織物 (ラテン語: *textus*)」に由来する語であり、上の引用にも現れる *tissu* や *tisser* の語とも語源を共有するからである。グラックが都市を往来のなす織物として捉えるとき、都市にテキスト＝織られた物としての性質が与えられ、都市とテキストは同一化されていく。つまり、グラックが都市と織物を重ね合わせるとき、都市自体がテキストに限りなく近づけられているのである。

一方で、都市とテキストの同一化自体は、グラック独自の着想とは言えない。『町』以前にも、すでにヴィクトル・ユゴーの『ノートルダム・ド・パリ』*Notre-Dame de Paris* (1831) において、「これ [書物] があれ [建築] を滅ぼすだろう」と題された章で、都市の建造物とテキストの重なりが暗示されていた。また、ロラン・バルト (1971) ⁶ は、ユゴーのこの章を起点に、

⁵ *FV*, p. 791-792.

⁶ Roland Barthes, « Séméiologie et urbanisme », 1971 ; recueilli dans *L'Aventure sémiologique*, Éditions du Seuil, 1985.

テキストとしての都市のあり方について記号学的に考察している。

その一方で、『町』を真に独特で豊かなものにしてしているのは、都市自体をテキストとみなすことで、都市のなかに異なる都市や、自作を含む多くのテキストを自由に織りこんでいく相互〈テキスト＝都市〉的なグラックの詩学である。

この「相互〈テキスト＝都市〉性」について確認するために、ここで、他の都市、自作、他者のテキストのそれぞれが、どのように『町』のなかで「引用」されているか見ていこう。同時に、これらの多層的な引用行為は、グラックにとっての特権的な都市ナントについてのテキストをより普遍的な都市論として読みうるものにかけていく機制にもなっていることを指摘していく。

ナントの特権性

議論の前提として、『町』におけるナントの特権性について指摘しておこう。『町』において、グラックが語るのは、基本的にリセの寄宿生時代を過ごしたナントについてである。グラックは、リセの卒業後に一度ナントを離れ、パリの高等師範学校で地理学を修めている。その後、1935年から翌年にかけて、兵役と母校のクレマンソー高等学校での教職のため、ナントに再び住むことになる。しかし、「町との初めての接触で刻み込まれた襍からその町が解放されることは決してなかった⁷」とし、2度目のナント滞在は、「奇妙なことに、町との新たな親交を結んだこの時期のいかなる具体的な思い出も私のなかに残らなかった⁸」とまで言われている。このように、グラックにとって寄宿生時代のナントは特権的なものであり続けたと言える。

また、他の町との比較においても、ナントはグラックのなかで特権性を付与されている。2つ目の章において、グラックは、アンジェを例に他の町と比較しながら、ナントへの偏愛を語る。グラックは、人口や路面電車の比較から「アンジェを完成した町と見なすことはできなかった⁹」というのだ。グラック自身も「不当な *injuste*¹⁰」、「公正さを欠いた *sans équité*¹¹」と認めるアンジェへの感情と比較して、「私の町でありつづけた¹²」というナントへの偏愛は、合理的な説明を超えた特権的なものである。

⁷ *FV*, p. 773

⁸ *Ibid.*

⁹ *Ibid.*, p. 779.

¹⁰ *Ibid.*

¹¹ *Ibid.*

¹² *Ibid.*, p. 776.

しかしながら、『町』は、ナントに関心を持つ限られた読者のみの興味を惹くような閉じられたテキストになってはいない。『町』の読者は、必ずしもナントの地理に精通した読者であるとは限らず、作者自身そのようなことを求めているわけではない。グラックが都市を書くとき、ナントについて書きながらも、閉ざされることはなく、より普遍的な「町」に結びつき、開かれていく¹³。その際に重要な機制となっているのが、グラックの相互〈テキスト＝都市〉性の詩学である。

〈テキスト＝都市〉の引用と「読み」の肯定

まず、ナント以外のさまざまな都市がどのように「引用」され、ナントに結びつけられているか確認しよう。

たとえば、グラックは、ナントとの出会いの際に感じた「不安やめまいの感覚¹⁴」を20年後、オランダからフランスに撤退する最中のムナンでの経験と結びつける。

私は、それから20年後、1940年5月の終わりにオランダから私たちを連れ帰った電車が一時停車したリール近郊——たぶんムナン——で、全く予期しないかたちで、忘れていた少年期のこの印象が蘇ってくるのを体験した¹⁵。

また、グラックは3つ目の章でも、同様にして、記憶を通じてパリ5区の街並みやポルトガルの都市をナントに結びつけていく。

奇妙なことに、クレマンソー高等学校からアンリ4世校、ついでエコール・ノルマルへ進んで、私はバンテオンのまわりにおいて、ほとんど忠実に〔ナントと同様の印象を〕再び見出したのだ¹⁶。

ナント自体も、はじめはそうに見えたものだ。ポルトガルを旅して、ポルトの町を通りかかると、私は今でも、どれほど熱気、つまりナントの通りの往

¹³ B. Damamme-Gilbert は、notre, nous など一人称複数形の使われ方や、同時代的な言及などからテキストの「対話性」を指摘し、『町』がナント以外への興味を排除するものではないことを指摘している。その点で、「町 la ville」、ではなく「ひとつの町 une ville」であることも、ナント以外の都市への開かれを示しているとする。

Béatrice Damamme-Gilbert, *La Forme d'une ville de Julien Gracq : lecture d'un lieu dialogique*, Minard, 1998. 参照。

¹⁴ *FV*, p. 782.

¹⁵ *Ibid.*

¹⁶ *Ibid.*, p. 785.

来の説明できない陽気さ（アレグリア）にのぼせ上がっていたか思い出す¹⁷。

上に挙げた例にとどまらず、グラックは『町』のなかで、記憶の想起を通して、ナントを様々な場所に結びつける。すでに指摘した都市とテキストの同一化を踏まえれば、次々と結びつけられるこれらの都市は、ナントのテキストを織りなすために引用された〈テキスト＝都市〉である。つまり、ナントについて書かれたテキストの端々に埋めこまれた多様な都市は、『町』を織りなす「引用」として見ることができる。

さらに、注目すべきは、このようなナントと他の都市を結びつける「引用」が多くのテキストを通じても行われることである。たとえば、グラックは、3つ目の章の初めに、ランボーがブリュッセルについて書いた散文詩の一節をナントの風景のなかに位置付ける。

「往来も商いもない通り」、私が好んで見返す『イリュミナシオン』の詩の一つからのこの引用は、私にナントのある地区の思い出をかき立てる。その地区は、どんな大通りも通っていないのだが、豪華な無気力、香り高いシエスタの雰囲気、公邸のかたわらに押し込められた美しい地区の夏にふさわしいあくびが漂っている（ランボーのテキストはブリュッセル —— レジャン通りと記されている）¹⁸。

上の引用でグラックは、ランボーがブリュッセルのレジャン通りについて書いたものと言及しながらもなお、ランボーの詩をナントの町と重ね合わせる。全く別の都市について言及されたテキストを自由なアナロジーによってナントに重ね合わせるグラックのこのような態度は、以下に見るブルトンによるランボーの詩とナントの結びつけと相似をなしている。グラックは、都市から「荒地 *terrain vague*」への突然の移行が見られる場所、とりわけ都市と田舎が相互に浸透しあう境界を形成するようなプロセ公園に対しての偏愛を語る。その際、医師としてナントに滞在中に同じ道筋をたどったブルトンのテキストを引用する。

「ナントの通りを介して、ランボーが私に完全にとり憑く。彼が見たものが、まったく別の場所で、私を見るものに干渉し、そこに取って代わろうとさえする。彼に関して言えば、それ以降、私がこの種の〈異常状態 *état second*〉を繰り返すことはもう決してなかった。毎日午後、一人で歩いて、ポカージュ通りの

¹⁷ *Ibid.*, p. 786.

¹⁸ *Ibid.*, p. 784.

病院から美しいプロセ公園まで私を連れていくかなり長い道は、『イリュミナシオン』と同じ光景へのあらゆる種類の眺望を開いてくれた。ここが、「少年期」のなかの將軍の家、あっちには「この木の太鼓橋」、もっと遠くにはランボーが書いた非常に特異なあの活気。それら全てが、まさに「カシスの川」をなす公園に沿った小さな水の流れのカーブのなかに飲み込まれていた。私はこのような事態のより合理的な解釈を提示することはできない¹⁹。」

ブルトンはここで、『イリュミナシオン』のいくつかの詩に言及しながら、ランボーのテキストの風景がナントに重なっていく様子を示している。ブルトンによる「憑依」的なランボーのナントでの現前から、ランボー、ブルトンからシュルレアリストとしてのグラックへの影響関係を論じることでもできるだろうが、ここで注目したいのは、ブルトンがランボーのテキストの光景をナントに結びつける手つきである。この手つきは、グラックが「ブリュッセル」をナントに位置付けた手つきと類似している。目の前の場所を超えて、都市と都市の結合を生み出すこのようなアナロジーは、相互〈テキスト＝都市〉的なものとして都市を書こうとするグラックの詩学を示すと同時に、『町』を普遍的な都市論へと開いていく重要な運動となっている。グラックは、上のブルトンについての引用のすぐあとで、以下のように評価を下す。

この文章のなかで私を感動させるもの、それは私のなかのあちこちに重大な影響をもたらした。それは、ランボーに特有の想像的な物質化の力に見事に贈られた称賛ではなく、それと同じくらい——他の年月、他の状況のなかでえられた経験を活気づけ、確かめる——ある町の特有の素質、つまりポエジーによって働きかけられた想像力に目標やモデル、道筋を供給し、ほとんど自然に最も特異なヴィジョンに向いていく、いかなるやり方によっても制約されないような町の力についてである²⁰。

つまり、ここでグラックがブルトンのテキストに見出すのは、テキストの「想像力」に肉付けするようにして「他の年月、他の状況」の「経験」に重なっていく「町の力」である。そこでは、他のテキストから得られた想像力に重なり合う「町の力」によって、都市は異なる都市に結びつけられていく。そして、ランボーの詩を例に見たように、全く別の場所について書かれたテ

¹⁹ *Ibid.*, p. 802. この部分は、André Breton, *Entretiens (1913-1952)* [1952], Gallimard, 1969, p. 36 からの引用である。état second (第二状態) は、「自分の行動を完全には意識できなくなる異常な状態」を示す医学用語 (Larousse Dictionnaire de Français オンライン版参照)。

²⁰ *FV*, p. 803.

クストを引用しながらナントに結びつける書き方は、『町』の全体を通して見られるものであった。グラックは、テキストを通じて異なる都市を結びつけるアナロジーを、ブルトンの引用から自らのテキストに引き入れている。ブルトンの引用に見出したような引用を通じて自由に都市を結合させる手つきは、『町』の相互〈テキスト＝都市〉性の詩学において重要な部分を担っている。異なる都市を結びつけるある種のアナロジーは、多層的な引用を通じてナントのエクリチュールを有機的に多様な都市と結びつけ、作品全体を駆動する力の一つとなっているからである。

以上のように、引用行為によって他の都市やテキストの想像力をナントに重ね合わせ、その相互〈テキスト＝都市〉的な総体としてナントを書くことこそ、『町』におけるグラックの都市の詩学である。

さらに、この相互〈テキスト＝都市〉性の詩学は、読者の「読み」の問題に大きく関わるものである。グラックが示す相互〈テキスト＝都市〉的な都市は、読者による相互テキスト的な「読み」の自由を肯定するものである。すでに述べたように、『町』の読者は必ずしもナントの地理に精通した読者である必要はなく、作者自身そのようなことを求めてはいない。そこで読者は、グラックのテキストからそれぞれにナントの町を思い描きつつ、同時にそこに描かれたナントを何らかの形で読者自身のなかの「町」を重ねていくはずである。たとえば、グラックがランボーの詩のブリュッセルを自らの町であるナントに重ねたように、読者もまた『町』に描かれたナントを想像しつつ、そこに自らの内部の都市を重ねて読む。その「読み方」は、グラックがブルトンから引き継ぎ、相互〈テキスト＝都市〉性の詩学として示してきたものである。あえて〈テキスト＝都市〉を自由に読み替えることで、異なる〈テキスト＝都市〉の想像力を自らの内部の町に現前させること。グラックが相互〈テキスト＝都市〉性の詩学によって書く町は、このような「読み」が肯定された空間としてあらわれるのだ。

グラック自身のテキストの引用

ここまでは、相互テキスト性の観点からグラックの〈テキスト＝都市〉を考察してきたが、グラックの〈テキスト＝都市〉の射程は、グラック自身の作品も含んだものである²¹。すなわち、ナントに織りこむテキストは、グラ

²¹ リカルドゥー（1971）やデーレンバック（1976）による区別を参照すれば、『町』におけるグラックの相互テキスト性の射程は、『町』と同一作者の他の作品の関係、すなわち「制限的な相互テキスト性 *intertextualité restreinte*」を含むものであると言える。同時に、『町』以外の自作を『町』の内部に引き入れている点で、制限的な

ック自身のテキストもまた例外ではなく、グラックは、ナントのなかにさまざまな形で自らのテキストや、そのモチーフを結びつけている。

グラックのテキストとナントの結びつきをみる前に、前提として、ナントが創作につながる源泉とされていることを確認する。

初めの章において、グラックは、外出制限をはじめとする 1920 年代の厳格な寄宿舎制度に触れ、そのような制約によって、かえってナントが「自由の空間そのものを象徴するようになった²²」という。厳重な「隔離 *réclusion*²³」のもとに置かれていたことで、グラックにとってのナントはフィクション、そして想像力のなかに開かれていくことになったというのである。ナントの特権化についてはすでに指摘したが、その背景には、このような創作の源泉としてのナントのあり方が挙げられる。グラックは、自らがナントで過ごした時期について、町がもたらす予感と結びつけながら、その後の人生を決定し、創作へとつながる「鉱脈」として特権化する。

少年期の終わり、思春期には、そんな強い動力を持ったイメージに浸され、可能性が私たちのなかに激しくひしめくのだ。[中略] 幸いなことに、私の少年期と思春期の何年かはひとつの鉱脈となり、のちの人生がそれを現金化することになった²⁴。

上の引用のように、グラックは町がもたらす予感、可能性の感覚を少年期から思春期にかけての多感な時期に結びつけながら、ナントを自らの創作の源泉となる「鉱脈」としている。

実際、以後の章では、ナントとグラック自身のテキストの深いつながりが示されていく。以下にいくつかの例を見ていこう。

たとえば、グラックは、「ゆるい結び目」としてのナントのイメージを語ったうえで、「周縁」に対する強い嗜好と「境界」への結びつきについて語る。

そして、ときどき考えるのだが、私を書いた本を思えば、周縁の地域に対するこの嗜好は、あとになって少しずつ拡大し、ついにはアナロジーの働きによ

相互テキスト性から「自己内部的な相互テキスト性 *intertextualité autarcique*」への移行を見ることができる。相互テキスト性に関する議論は、以下の著作も参照した。土田知則『間テキスト性の戦略』、2000年、夏目書房。

²² *FV*, p. 773 「このように長い間、半ば禁じられていた町は、ついには自由の空間そのものを象徴するようになった」。

²³ *Ibid.*, p. 772.

²⁴ *Ibid.*, p. 773-775.

て、予期せぬ領域にさらに影のある調子で現れるほどに拡大したのだ。つまり、周縁から境界までは、想像力にとって、たったの一步でしかない²⁵。

作家はここで非常に抑制的にはあるが、自らのテキストとナントがもたらした周縁部への嗜好の結びつきを示してみせる。『シルトの岸辺』の詩学とも言える周縁への嗜好とそこから境界にいたる想像力を、グラックはナントのなかに位置付ける。町を「フィクションのための頑丈なトランポリン²⁶」と表現するように、グラックにとっての町は、作品を生み出す土壌となったものである。ここからも、グラックにとってナントの町は、作品の「鉱脈」、すなわち作品が生まれる源泉にある体験や感情が散りばめられたものと言える。

また、4章において、グラックは「プチ・ポールの競馬場に残る思い出からは、半世紀後になって、私のなかに「コフェチュア王」の物語が芽吹いたようだ²⁷」とし、競馬場と結び付けながら自作の源泉を示している。この競馬場は、ブルトンが言及していたプロセ公園と同様、都会と田舎の境界にあり、グラックを引きつける荒地である。グラックは、1920年代には競馬場が社交界の優雅さと結びついていたことを挙げ、そのような「立ち入れない社交界の豪奢さの反映は、私にはぼんやりしたプチ・ポールのクマシデの周りにとどまっていた²⁸」という。そして、「ベル・エボックと失われた優雅さのイメージ」が「少年期に織りなされたこのつながり²⁹」によってもたらされていると述べている。そのうえで、以下の引用では「コフェチュア王」を再びプチ・ポールと結び付けながら、書物が植物のように「根」を持っていると書いている。

私とその物語 *récit* を書いていた間、ラ・フォージュレは、プチ・ポールのとても侘しい木陰から再び不意に現れるもの以外から、その濡れた孤独を汲み出すことは決してなかった。書物は、植物のように根をもっている。そして、植物のように、しばしばそれは優雅さもなく、華々しさもないものである³⁰。

ここでいう書物の「根」とは、「コフェチュア王」にとってのプチ・ポー

²⁵ *Ibid.*, p. 792.

²⁶ *Ibid.*, p. 774.

²⁷ *Ibid.*, p. 808.

²⁸ *Ibid.*

²⁹ *Ibid.*

³⁰ *Ibid.*

ルの競馬場の木陰であり、他のグラックの作品にとってのナントの町そのものである。つまり、ここでの書物の「根」は、作品の源泉として作家の根底の部分にある町である。ここでもグラックは、自らのテキストをナントの風景のなかに位置づけ、織りこんでいる。

さらに、9章において、ナントからロンドンへの旅立ちの朝を回想する部分で、グラックは以下のように『シルトの岸边』の冒頭部分と結びつけている。

この出発のことはとりわけ鮮明に覚えている。『シルトの岸边』の冒頭を書いたときにも、私はそのことを思い出していた³¹。

『町』全体のなかでもとりわけ美しく、情感豊かに語られるこの回想を、グラックは「母胎」のように自分を育んだ町との「分離」として語っている。そして、ナントを出発していく朝が、『シルトの岸边』の冒頭部分で語り手アルドーが首都に向かって故郷を出ていく場面に重ねられているのである。『シルトの岸边』では、アルドーがシルトへと出発する朝は、「明け方に、住み慣れた町を見知らぬ目的地に向かって立ち去っていくことには、大きな魅力がある³²」と書かれる。その出発は、アルドーにとって「眠りこけたオルセンナの街路」のなか、「すっきりした別れだった」とされる。ちょうどそれは、「明け方の通りの空っぽさに初めて気がついたのだが、それは魔術的に思えた。[中略]町は、通りから通りへと別れを告げた、微笑みながら。その時が来たのだ。この別れに漂っていたのは、陰りのない軽さの感覚だった³³」というグラックの出発に重なっている。ここでもグラックは、創作の源泉を示しながら、ナントの風景のなかに自らのテキストを位置づけていく。

以上では、グラックが直接的に自らのテキストとナントを結びつける箇所を見てきたが、それ以外にも『町』のなかでグラックの作品とのつながりを想起させる箇所は枚挙にいとまがない。1章で示される寄宿舎の厳格な制約がかえって想像力をかきたて、町全体を想像力に開いていく機制は、『シルトの岸边』の詩学を喚起するものだ。また、5章で語るオペラと劇場地区の特権性には、『アルゴールの城にて』でみせたオペラやワーグナーへの偏愛

³¹ *Ibid.*, p. 869.

³² *Le Rivage des Syrtes*, dans *Œuvres complètes*, t. I, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1989, p. 559.

³³ *FV*, p. 870.

を感じさせられる。グラックがナントの「ポケットガイド *vade-mecum*³⁴」になぞらえてみせる『町』は、同時にグラックのテキストをめぐっていくガイドになっているのである。

以上のように、『町』では、ナントは創作の源泉として特権化され、多くのグラックのテキストがナントに結びつけられている。つまり、『町』において、相互〈テキスト＝都市〉性の射程は、他者のテキストだけではなく、グラック自身のテキストも含まれている。

他の都市の記憶やテキストの想像力、自らのテキストも含む総体としての都市を書くこと。それこそが『町』が試みるテキストのあり方である。都市自体もテキストと同一化し、多くの都市や自他のテキストから多層的に引用を重ねる相互〈テキスト＝都市〉性の詩学によって、あらゆるテキストが有機的につながる都市の姿が読者の前に立ち現れるのである。

実存的空間としての都市の詩学

都市の身体化 —— 都市と実存

『町』において、都市が相互テキスト的な織物として表現されていることは第1章で見てきた。他の都市の記憶や自作を含む多くのテキストの総体として書くグラックの詩学の背景には、都市空間を単なる外在的な環境としてではなく、作家の実存にかかわるものとして捉えるグラックの洞察がある。以下では、グラックにとって、ナントが単なる外的環境ではなく、「生きられた空間」として捉えられ、作家の実存と深く結びついたものであることを示す。そして、『町』全体が実存的空間として都市を書くグラックの詩学につらぬかれていることを指摘する。

まず、実存的空間としてのナントについて考えるうえで、注目すべきは、都市が身体と結びつきながら、作家との相互生成をするものとして表現されることである。

『町』において、都市は繰り返し身体的な表現を用いて表象されている。このような都市の身体化は、たとえば *cœur*（心臓、中心部）や *artère*（動脈、幹線道路）のように語自体にすでに都市と身体双方のイメージが定着しているものから、グラックの比喩によって身体と結び付けられていくものまで、様々なレベルで多層的に重なりながら『町』のエクリチュールを構成して

³⁴ *FV*, p. 774.

いる。このような『町』における都市の身体化は、すでにいくつかの先行研究において指摘されてきた³⁵。塩塚（2021）でも指摘されるように、都市を身体化するエクリチュールは、町自体を「生命体」として捉えるものと言える。都市を生命体として捉えるとき、道路や街路は血管のイメージ、そこを移動する人間は血液のイメージで表現されていると考えられる。

しかし、『町』では、グラックは単に生命体としての都市の内部を移動する存在として書かれているのではない。『町』において、作家は、都市という生命体のなかで育まれながら、逆に想像力や夢をふくむ作家自身の生にしたがって都市を変形し、つくりあげていく存在として書かれているのだ。

『町』の内容全体を予告する1章において、グラックは、自分が試みるのは、「町の肖像」ではなく、町と「私」の相互関係を示すことだと述べる。

私は、ここでひとつの町の肖像を描こうとしているのではない。私が示そうと試みたいのはただ —— こうした回想にはつきもののぎこちなさ、不正確さやフィクションもそのままに —— いかにして、町が私を形づくったか、つまり、どのように世界と私のあいだに町が置いた変形をもたらすプリズムを通して、読書によって、私が目覚めたまま想像の世界を見るよう、ある部分では促し、ある部分では強いたのか。そして私のほうでは、[寄宿舎の] 隔離生活によって、より自由に物質的な目印と距離をとることができたのだが、いかにして私は、自分の内的な夢想のかたちに沿って町をつくり直したのか、客観的な法則より欲望の法則に則って町に肉と生命を与えたのか、ということだ³⁶。

ここでグラックがいう「肖像」とは、眼前にある動かない対象の似姿としての作品、すなわち、自己の外部に固定されて存在する町を客観的に写しとることを志向するテキストを指していると言えるだろう。それに対し、グラ

³⁵ 前出の B.Damamme-Gilbert (1998) は、前提として都市の身体化のエクリチュールが都市自体に生命を与えるものだと指摘したうえで、都市の身体化をとりわけ女性の身体との結びつきに注目しつつ分析している。ここでの『町』における都市の女性化は、大まかに町と「母」の重ね合わせ、都市のエロティックな形象の二つの点から論じられている。一方で、主要な街道が通っていない地区を「血の循環の悪い塊 *cette masse mal irriguée*, *FV*, p. 793」と喩える表現や、広場を「不健康な動脈瘤でところどころが腫れたくねくねした動脈 *une artère sinueuse, boursoflée d'anévrismes malsains*, *FV*, p. 794」と喩えるような表現までも母親や女性の身体と結びつけることは難しいだろう。塩塚（2021）でも都市の身体化に言及され、都市を生命体とする観点から『町』での「空き地」の称揚や歴史的建造物への否定的な評価に結びついていてと指摘されている。本論では、都市をより大きく「生命体」として考える塩塚の論を引き継ぎつつ、都市を生命化するグラックの書き方の背景にある都市を作家の実存と関わるものとして提示するグラックの詩学に着目する（塩塚、前傾論文）。

³⁶ *FV*, p. 774.

ックが展開しようとする町のすがたは、作家の内面との関係のなかで絶えず変形されながら立ち現れるものである。このようなグラックの態度は、この章の最終文において、再び明示される。

こうしてナントの街並みをたどりなおそう。自己満足を甦らせるような過去にめぐり合うためではなく、むしろ私が街並みを通してなったものと、街並みが私を通してなったものにめぐりあうために³⁷。

すでに述べたように、1章は『町』全体の流れを予告すると同時に、そのテキストの方向性を示す序文の役割を果たしている。つまり、外在的な環境としてではなく、想像力や夢想を含む作家の生とかかわり、相互に生成しあうものとして都市を書くこととする試みは、『町』全体をつらぬく詩学として位置づけられているのである。

「実証」の拒否

作家と相互に生成しあう空間として都市を捉えるグラックの詩学をより鮮明にするのは、「実証」を拒否するグラックの態度である。この実証の拒否は、本稿でみてきた自在な引用によって都市とテキストを有機的に結びつける相互（テキスト＝都市）性の詩学をみちびくと同時に、相互に生成しあう空間として都市を書くうえでのグラックの根本的な態度となっている。

グラックは、7章においても、1章で用いた「肖像」や「プリズム」といった語を反復しながら実証を拒否する。

そもそも、私はいかなる点においても、ひとつの町の真実の肖像を描こうなどとはしていない。その町は、町のプリズムを通していて、私にとって光を手つかずのまま通り抜けさせることは決してない。すでに言ったように、私は自分のなかの町の存在しか典拠にすることはない。私が知ったあらゆる町のなかで、そこだけはいかなる名目においても実証に従属することはないのだ³⁸。

ここでの「実証」もまた「真実の肖像」と同様、自己の外部に歴史的、定量的に画定された都市を典拠として参照するものである。同時にグラックは、「自分のなかの町の存在しか典拠にすることはない」とし、あくまで内在的な都市を書くことを『町』の詩学に据える。つまり、グラックはここでも自己の外部に画定されたものとしての町の観念を否定し、自己の内部と結びつ

³⁷ *FV*, p. 775.

³⁸ *FV*, p. 843-844.

くものとして捉え、書こうとしている。

実存的空間としての都市の詩学

以上に見てきた実証の拒否は、『町』の詩学をみちびくグラックの根本的態度である。本論で指摘してきたアナロジーによって自由に都市を結合させる相互〈テキスト＝都市〉の詩学も、このような実証を拒否する態度に支えられたものだといえる。さらに、作家と都市の相互生成的な側面と、この実証の拒否をあわせて考えるとき、実存的空間として都市を書こうとするグラックの詩学はより鮮明に浮かびあがる。

都市と作家の相互生成の観点からすれば、身体化された都市空間は、単にグラックの外部にある生命体としてだけではなく、グラックの自身の生とも重なり合うものとして考えるべきである。つまり、『町』で書かれる都市は、単にグラックを育んだ外部の環境ではなく、グラック自身の感覚や記憶、欲望とともにかたちを変え、作家の内面に結びつく「生きられた空間」なのである。以上のように、単なる外的環境としてではなく、実存的空間としてナントを書くことこそ、『町』をつらぬくグラックの詩学である。

このような実存的空間としての都市の詩学は、『町』と同時代の空間に対する新たなアプローチと重なり合うものでもあった。1970年前後から、地理学の分野でも人間の生きる空間に大きな関心が払われ、現象学的な手法をとりいれながら「実存的空間」に焦点をあてた研究が隆盛する。想像力や夢想が人間の生きる空間に与える強い影響は、ガストン・バシュラール『空間の詩学』*La Poétique de l'espace* (1957)ですでに分析されていた³⁹。さらに、1970年代ころから、バシュラールや、グラックが高等師範学校で学んだフランス学派地理学からも強い影響を受け、現象学的なアプローチをとりいれた人文主義地理学 (*la géographie humaniste*) が隆盛する。トゥアンやレルフラを中心に北米で確立された人文主義的アプローチは、1980年前後からフランスでも活発に紹介されている。この人文主義的アプローチは、実証主義を拒否し、個人が成長し生活する「生きられた空間 *l'espace vécu*」を重視するものだった。客観的法則より、「実存的空間 *l'espace existentiel*」としてのあり方を重視する人文主義地理学のアプローチは、『町』の詩学と大きく重なるものである。また、人文主義地理学の流れと並行するように、フランスにおいても

³⁹ グラックはバシュラール本人と面識があり、いくつかのテキストのなかで言及していることから、『空間の詩学』を参照している可能性は高い（ただし、『空間の詩学』への直接的言及はない）。

現象学からも影響を受けたミシェル・ド・セルトーの空間論 *L'Invention du quotidien* (1980) があり、テキストや身体とかかわる実存的空間としての都市が鋭く考察されている。これらの空間への新たなアプローチの根本には、計量的手法の偏重や実証主義への抵抗があり、実証を拒否するグラックの態度とも共通している⁴⁰。このように、都市を外的に画定された空間ではなく、自己の身体や内面と結びつきながら相互生成する空間として書くグラックの詩学は、実存的空間を重視する同時代の大きな空間の思考の流れのなかに位置づけることができる。

一方で、本論で指摘してきたグラックの詩学には、同時代の空間への思考の枠のなかでは捉えきれないものも多くある。たとえば、バジュールや人文主義地理学者など、これらの新たな空間へのアプローチのほとんどが「住むこと」と親密な空間としての「家」に大きな重要性をおくのに対し、『町』では、「その町に本当の意味で住んだことはなくてもいい⁴¹」とされる。むしろ寄宿舎生活の制約が町を「かえって自由を象徴する空間」にまで変化させ、夢想と想像力に開いていく契機とされていた。このような制約がより強く想像力と町を結びつける機制は、グラックが自由に他の都市やテキストの想像力をナントに結びつけ、相互〈テキスト＝都市〉的に都市を書く起点となっている。この点で、親密な空間としての「家」に「住むこと」を出発点に実存的空間の形成を論じるアプローチとは異なっており、ここにグラックの独自性がある。つまり、グラックにとっての実存的空間は、過去を統合する親密な空間としての家に住むことから解放され、相互〈テキスト＝都市〉的な想像力へとより強く開かれているのだ。したがって、厳格な寄宿舎の制約のもとにナントに生活したグラックの個別的な体験を起点に、実存的空間としての都市の詩学と相互〈テキスト＝都市〉性の詩学が結びつくことで、『町』は真に独創的で豊かなテキストとしてあらわれてくるのである。

結論

グラックは、都市とテキストを重ね合わせることで、都市や自他のテクス

⁴⁰ 高等師範学校で地理学を修め、長くリセの教員をつとめた地理学の専門家としてのグラックの一面を考えれば、これらの空間論を直接参照していた可能性もある。ただし、いずれの空間論についても、現段階で実証的な水準でグラックとの直接の影響関係を詮議するのは困難である。グラックのテキストには、作家の遺言にしたがい、未だ公開されていないものも残されており、今後のさらなる調査が待たれる。

⁴¹ *FV*, p. 771.

トを引用としてナントの町と自在に結びつけていた。この相互〈テキスト＝都市〉性の詩学によって、『ひとつの町のかたち』において都市は他の都市や多様なテキストと有機的に結びつく総体として表象されていた。グラックが偏愛するテキストをナントに位置づけ、創作の源泉となる風景を綴ることで、そこでは作家の形成の秘密が明かされる。まるで作家グラックのガイドブックであるかのような本書の特徴も、このような相互〈テキスト＝都市〉性の詩学のもとにつくられたものである。

さらに、そのように記憶やテキストの想像力を自在に都市に結びつけるグラックの詩学の背景には、実証を拒否し、都市を身体と結びつけながら自らと相互生成するものと考え、自らの生にかかわる実存的空間として都市を捉えるグラックの空間認識があった。この実存的空間としての都市の観念は、同時代的な都市空間への新たなアプローチと類似するものであった。その一方、それらの空間論の多くでは、家に住むことが過去を統御する中心点を都市空間のなかに形成することを重視するのに対し、『ひとつの町のかたち』では作者のナントでの個別的な住体験を起点に、夢想や想像力と都市の結びつきがより重視される。それにより、過去を固定し、凝集する中心点としての家や、住むことから都市は解放されている。この点に関するより実証的な研究は今後の課題としたいが、『ひとつの町のかたち』の独特なエクリチュールをかたちづくるのは、相互〈テキスト＝都市〉性をもった実存的空間として都市を捉えるグラックの都市の詩学に他ならない。そして、グラックが都市の変化を肯定するのをもまた、彼の詩学に裏打ちされた態度である。過去をとどめおく中心点としての都市の空間概念から解放されることで、都市は人間の生と重なりあいながら、かたちを変えつづけ、時間のなかに開かれた空間として立ち現れてくるのだ。